

一九九〇年代の思い出

松本衆司

私がチューターを始めた一九九〇（平成二）年十月はまだ文学学校の校長は小野十三郎であった。もう高齢で谷町七丁目の学校に来られることもなく、直に小野さんの薫陶を受けることはできなかった。ただ、八一年頃だったと思うが、一度だけ文校のある建物の階段で小野さんをお見かけしたことがあった。徳之島出身の詩人作井満との二人誌「みいる・みのりて」や私の個人誌「KIEB・LA」の制作でお世話になっていた詩人野口豊子に支えられながら、小野さんは一段一段と慎重に階段を下りて来られた。そんなときだったので、残念ながら挨拶することも憚られた。実は、小野さんに一度だけ手紙を認めたことがある。七七年の韓国旅行から戻ってしばらくの頃だった。韓国で、あの北原白秋がその日本語の巧みに感嘆したという訳詩集『朝鮮詩集』（岩波文庫）の著者金素雲と出会った。金さんにご挨拶させていただいた折、私が大坂出身と伝えると、小野さんのことをとても懐かしがられた。そのエピソードとともに金素雲さんの写真をお送りした。小野さんからの返事はなかったが、それでよかった。その小野十三郎の詩論には大いに学んだ。「エリオットに

よれば、考える詩人とは、思想の情緒的等価物 (emotional equivalent of thought) を現し得る詩人のことである。思想の情緒的等価物というのはちよつとむずかしい表現だが、これは思想を完全に情緒化したかたちで現わすということだろう。一つの思想を、その観念形体のまま詩の中にながすのではなく、いわばそれを匂いのようなものに転化させて表現できる詩人がつまり『考える詩人』だ。』（現代詩とは何か）『現代詩手帖』創元社刊より）とりわけ、この一節は私の詩の向かうべき方向を決定づけるものであった。

チューターとしての仕事は、当時、その運営組織である大阪文学協会の理事長をしておられた倉橋健一から依頼されたのだが、翌九一年には当時月刊だった機関芸芸誌「樹林」の編集も富上芳秀と私に任された。二人でさまざまな企画を考え、装丁も一新した。その皮きりの三月号は小野十三郎特集とした。富上さんの司会で、杉山平一、寺島珠雄、三井葉子そして倉橋さん、この先輩詩人達に小野十三郎を存分に語っていただいた。少し傍系の立場からの杉山さんの温厚な語り口が、編集の立場で参加した私に爽やかな印象を残した。後

に、杉山さんからいただいた私の拙い詩集への返信の言葉は、今も心にある。

九二年春に倉橋さんが文学学校を去り、経営状態の悪い文校再生のため大阪文学協会の理事が一新された。新たに、小説クラスチューターで事務局長の木辺弘児を協会の代表理事とし、前年の秋に大阪文学学校の二代目校長に就任した長谷川龍生、小説クラスの葉山郁生、高島寛、牧川史郎、詩・エッセイクラスの西村博美、高田文月、そして富士さんと私がその任にあたった。皆で話し合い、力を尽くした思い出がある。

九三年十二月に組会の人々と詩誌「メイ・プル」を創刊した。創刊同人は西田裕美、小松順子、西照、添ひろみ、森下雅子、丹田亮子、なかむらきこ、青井海南、谷口馨、金英恵。その多くが三十代の女性だった。B5裁ち切りの白のA4紙で詩を二段に収め、巻末の目次にはそれぞれの小さな顔写真と百字余りの独り言のようなコメント、そんな編集と装丁だった。その創刊号に認めた巻頭随想の一部を引く。「近頃、クレオール主義という言葉が少し話題を呼んでいる。クレオールとは、植民地のジャングルから生まれた異種混交的な言語文化の意であるが、このことばを我々の現実引き寄せて言えば、〈現実的なパラダイムの国境や人種、あるいは性差を越え、柔軟で流動的な精神と発想のクレオール主義を考えたい〉と、なるのではないか。それこそが、人間のあるべき生理や本能へのアプローチであり、自己の回復に他ならないと思う。都会生活に疲れた人が自らの足で山歩きするように、

あるいは、水辺に佇むように、自らの個性を触媒として、新たな世界を描き出したいと願っている。」そんな願いを込めた詩誌の創刊であった。

「メイ・プル」の創作活動の一環として、〈街角の詩人〉と名づけた小さな朗読会も回を重ねた。一九九三(平成五)年五月に第一回、九四年三月に以倉紘平をゲストに第二回、九五年十月には萩原健次郎をゲストに第三回。九六年八月には阪神淡路大震災で傷ついた神戸で第四回を、安水稔和をゲストに迎えて開催した。ピアノリスト福島久仁子によるエリック・サティなどの小品の演奏による詩の朗読の時間は、得がたいひとときになった。特に大震災後の神戸の風月堂ホールでの時間は、鎮魂の思いを込めた朗読会であった。

「メイ・プル」は九八年十二月、十二号で終刊した。終刊同人は創刊以来の西田さん、小松さん、西さん、添さん、森下さん、丹田さん、なかむらさん、谷口さんに加え、内藤ねり、立野雅代、あかね直、畑章夫、木の下たからだった。その終刊号に認めた巻頭随想を引く。「八月の終わり、奈良の明日香で開かれた〈歷程・夏のセミナー〉に参加した。(略)日高てるさんに依頼されたことは、〈現代詩はいま〉という題で、以倉紘平さんと西村博美さんとはくとの鼎談ということだった。そのことの打ち合わせということで、八月月上旬に、明日香を訪ねた。橿原神宮前駅で待ち合わせをし、日高さんや奈良の詩人の方たちとともにまず訪れたのが、飛鳥藍染館だった。そこで洒落た昼食をご馳走になった。築百五十年にもなるという民家を借り受けた渡邊誠彌さんが経営し、

藍染めの指導をされている。佇まいは昔の大和そのままに、三和土や上がり框があり、三和土は裏の庭に通じている。鄙の風情を残し、アンティークな雰囲気の調度を現代風にアレンジしてある。壁に掛けられた絵も幻想的で魅かれた。主人のセンスの良さがうかがえる。その渡邊さんは元NHKのアウンサーで、暫く座をともしたが、上品で知性豊かな語り口がその一語一語の言葉の奥行きを感じさせてくれる。氏は定年を前に自らの人生のために大英断をされたわけだ。

(略) ぼくは常々、一流の詩人は詩を書かない、と思っている。生き方が深いのだ。現世の欲への執着を離れたこの前掛け姿の渡邊さんのように。このような人を方外というのかもしれない。セミナーの鼎談では、日本の文芸における〈雅〉と〈俗〉の考え方をベースに、今日の詩の精神性に触れた。

何やら、上代から流れ込んだ明日香の幽鬼的な抒情に掠めとられるかのような妙な気分だった。」

以来、どれほどの月日が流れたか、九八年の夏の風景の中に懐かしい人々の顔が浮かぶ。右の文章で、私は「方外」という言葉を用いている。実は、その九八年の十一月に「方外」という詩誌を創刊している。この同人誌は五号まで続いたが、その表紙に6ポイントで小さくこう書いた。「ここに集った人達は、新進の詩人たちである。しかし、それは個人的なこと。いわゆる世間の出来事ではない。それでいいはずだ。どうあっても個人の仕事でなければならぬものもある。それに関われることは、もしかして、人間としてとても贅沢なことではあるまいか。詩誌名は〈方外〉とした。方とは、まち、

或いは階級という意味。その外にいるのが、文人である。方外は自由だが、誰にも頼れない。」これも大阪文学学校の夜間部詩・エッセイクラスの人々の詩誌であった。「方外」の創刊メンバーは畑章夫、山村由紀、堤中晴美、堂本直正、山村磨喜子、古川節子、松岡美佳、北野滋子、田中智代、塩見弥代子、まつおかずひろ、あかね直、森山和雄と私であった。編集はあかねさんと森山さんが担当した。

「方外」の終刊は二〇〇〇年八月で、終刊メンバーは畑さん、堂本さん、山村さん、そして編集のあかねさん、森山さんに加えて、清水直昭、こうだ・こうこ、片山光雄、河上政也、渋谷ゆう子であった。実は、九八年二月末をもって私はチューターを辞めている。理由はいくつかあるが、最も大きな理由は勤務する中学高等学校の教員としての職務多忙ということになる。何やら、いっぱいになってしまった感があった。辛うじて「方外」の五号までだった。そんな気がする。そうして少しずつだが詩が私の中で薄れていった。

オクタビオ・パスの詩の一節を引く。「私が見るものと私が言うこととの間に／私が言うことと私が黙っていることとの間に／私が黙っていることと私が夢みることとの間に／私が夢みることと私が忘れることとの間に／詩は、ある」やはり、詩を書くには「間」を見つめる思索のときが必要であった。